

## 早稲田・ストラスブール TAISI 国際シンポジウム「The Borders of Nation-States: Mobility of Persons and Citizenship in Asia and Europe（国民国家の境界—アジアとヨーロッパにおける人の移動およびシティズンシップ）」

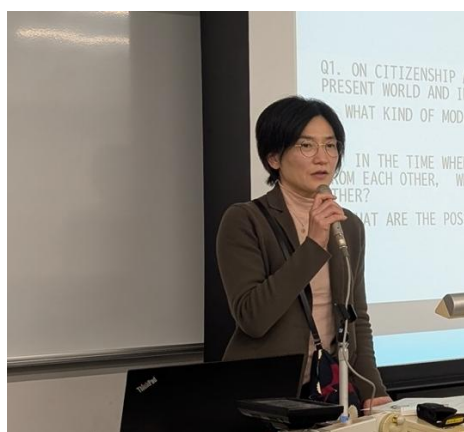
### ◆ 開催レポート

2025 年 1 月 17 日（金）、早稲田キャンパスにて TAISI 国際シンポジウム「The Borders of Nation-States: Mobility of Persons and Citizenship in Asia and Europe（国民国家の境界—アジアとヨーロッパにおける人の移動および市民権）」を開催しました。

本シンポジウムは早稲田大学先端社会科学研究所とストラスブール大学法学部・国際ヨーロッパ研究センター(CEIE)の共催により実現しました。会場とオンラインによって日本だけでなくフランスのストラスブールからも参加可能なハイブリッド形式で開かれ、30 名を超える参加がありました。前半は、3 人の研究者と 2 人の大学院生が「市民権」、「アイデンティティ」、「地域統合」、「移民」、「国民国家」キーワードを基にそれぞれの研究領域の発表を行いました。後半は、前半の発表者に 2 人の論者を加え意見交換を行い、ヨーロッパとアジアを比較する視点を踏まえて包括的な議論が展開されました。

ここからは、シンポジストとして参加した 2 人の大学院生が、シンポジウムの報告と体験談を語ってくれました。

【開会挨拶】先端社会科学研究所副所長の吉田敬氏（早稲田大学社会科学総合学術院教授）より開会の挨拶がありました。その後、本シンポジウムを企画者で司会を務める早稲田大学社会科学総合学術院教授・ストラスブール大学 CEIE 客員研究員の鈴木規子氏より、本シンポジウムの趣旨説明がありました。



鈴木規子氏

【第 1 報告】早稲田大学文化構想学部教授の樽本英樹氏から「A Comparative Study of Migration and Citizenship in Asian and in Europe（アジアおよびヨーロッパにおける移民お

よび市民権の比較研究)」と題して話がありました。グローバル化する社会において多国籍の人々と交わる機会が増えており、多様な考え方の存在が地域統合の障壁となっているが、その一つの解決策が市民権であることを示しました。国の構成員を区分し、外側にいる移民を包含する市民権の枠組みによる国家統治のあり方を示唆しました。その上で世界的な傾向として、国民の社会的権利は制限され、移民などのマイノリティの権利は強化されているのに対して、アジアにおいては必ずしもそうっていないことを日本、韓国、台湾の外国人の入国状況や入管制度の例を挙げて説明しました。

【第 2 報告】早稲田大学大学院社会科学研究科大学院生の佐藤千潤氏は「The Practice of Religious Education for the Realization of Multicultural Society: The Case of Belgium（多文化社会実現に向けた宗教教育の実践―ベルギーの事例）」と題し、多文化社会のベルギーにおいて実施される宗教教育について発表しました。ベルギーのオランダ語共同体に注目し、多様な宗教的な背景をもつ人々から成る社会において、学校教育で様々な宗教教育が実践されている実態をインタビュー調査から明らかにしました。その研究結果に基づき、宗教教育は、多文化社会において 自分や他者の宗教について理解を深める機会を与えており、社会の分断を和らげる一つの効果的な仕組みなのではないかと紹介しました。



佐藤千潤氏

【第 3 報告】早稲田大学大学院社会科学研究科大学院生の渡邊光生氏は「Comparison of free movement of people in ASEAN and EU – Mutual Recognition Arrangement (MRA) on professionals（ASEAN および EU における人の自由移動の比較―専門職の相互承認制度）」と題して発表を行いました。渡邊氏は、自由移動の 4 つの基本要素（人・モノ・資本・サービス）の内、人の自由移動は労働者の資格の承認制度と最も密接に関連するとし、国家間の資格の相互承認制度（MRA）が域内の人の移動を促進していることを説明しました。そして、欧州連合（EU）と東南アジア諸国連合（ASEAN）の資格の承認制度は、地域統合に向

けた共通の目標を有しているが、制度の基礎、コア規範、承認の型に違いが見られることを指摘しました。



渡邊光生氏

【第4報告】大妻女子大学比較文化学部教授の井上淳氏が「Market citizen, citizenship and national borders: an implication of healthcare professionals' mobility between the EU and the UK（市場市民、市民権、国境—EU・英国間の看護職人材の移動が意味するもの）」と題して、イギリスへの看護職の移動について、イギリスのEU離脱（いわゆる Brexit）に伴う影響について発表をしました。冒頭、EUの人の自由移動の歴史を概観し、イギリスの強い国境管理を示しました。そして、Brexit後はEU市民権に基づき移動する人の割合が減少しており、イギリスへの看護職の移動も減少したことを示しながら、イギリスは看護職の確保に失敗していると主張しました。



井上淳氏

【第5報告】ストラスブール政治学院教授の Birte Wassenberg 氏は「Perceptions of Europe at the Franco-German Border: key witnesses from the Border Region Alsace（仏独国境地帯におけるヨーロッパ観—アルザス国境地域の証言者たち）」と題して、ヨーロッパ市民意識

がどのように醸成されるか、歴史資料やインタビュー調査から得た仏独国境地帯のアルザスに暮らす人々の証言を紹介しました。戦争によって国境を蹂躪された強烈な記憶をもつアルザスにおいて、平和のために国境のないヨーロッパを実現するには、人々のヨーロッパ市民としての意識が重要な要素となるため、そうしたヨーロッパがどのように人々に捉えられているかを説明しました。



Birte Wassenberg 氏

【全体討論】専修大学教授法学部准教授の黒田友哉氏と東海大学国際学部教授の小山晶子氏を迎え、それぞれの登壇者へのコメントをしました。会場とオンラインからの質問の内容は幅広く、相互に考えを巡らす有意義な時間となりました。



登壇者たち(左から順に渡邊光生氏、井上淳氏、佐藤千潤氏、Birte Wassenberg 氏、樽本英樹氏)



黒田友哉氏



小山晶子氏

【大学院生のコメント 1 渡邊さん】

国際シンポジウムが開催されたのは、修士論文の提出間際でした。それまで大学院で研究してきたことを発表する機会は大きな刺激となり、その機会を作ってくださった指導教員に感謝しています。しかし、研究成果にある程度の自信を持って全力で挑んだシンポジウムは、結果として消化不良で終わりました。自身の専門領域を深めることは当然のことながら、他者と議論をするには、関連する全体像を掴む能力を育て、専門領域を横へ広げる力が求められることを痛感しました。また、シンポジウムは正解を見つける場ではなく、その醍醐味は研究者がお互いの専門領域を持ち合いぶつけ合うことによる化学反応から気付きを得ることなのではないかと感じました。

【大学院生のコメント 2 佐藤さん】

指導教員から本シンポジウムでの発表のお声がけを頂いた時から、経験豊富な教授の方々を前にして発表することや海外からの参加者もいるということで、緊張と不安で一杯でした。しかし、修士課程修了後に就職の道を選んだ私にとって、このような学術的なシンポジウムで発表できる機会は二度とないかもしれないと感じて、参加を決めました。知識面では教授に到底及びませんが、発表時にはインタビュー結果などを中心に、独自の分析から自分なりの解釈を投げかけようと思いました。日本で育った無宗教の私が、「ヨーロッパの宗教観」を理解し、そこに考察を加えることは、やや無謀のように感じましたが、最後の最後までご指導いただいた教授に大変感謝しております。また、学生のうちに国際的な視点から社会問題を考える機会を頂き、シンポジウムでの発表を経験させて頂いたことは光栄でした。